

マリアは"一応"貴族令嬢だった。父が事業で失敗してからは吹けば飛ぶような極貧男爵家ではあったが、先祖代々受け継いできた土地で暮らす領民達は、没落後も皆が家族のように可愛がってくれたし、母を早くに亡くしていたマリア自身も、何かと世話を焼いてくれる皆のことを家族同然のように思っていた。余裕の無い暮らしのため、まだ家が潤っていた先代当主の頃から勤めてくれているじいやとばあや以外には使用人もおらず、名ばかりの男爵令嬢であるマリアも広い屋敷を管理する為に、朝早くから夜遅くまで掃除に洗濯、裁縫、畑仕事にと毎日とにかく忙しく動き回っていた。

しかし、そんな慌ただしくも平穏な日々に、突如終わりが来た。シトシトと静かな雨の降るある日の朝のことである・・・

「マリアッ！！」

少しでも家計の足しになればと部屋でハンカチに刺繍をいれていた時、いつものんびりとしている父が真っ青な顔で部屋に飛び込んできた。驚きのあまり思わず刺繍を落っことしそうになったが、間一髪で持ち直す。よく出来ていたので、落ちて汚れてしまったは大変だ。

「もう、お父様ったら！ビックリするではないですか！」

マリアが母に似たアイスブルーの瞳を半分にしながらじろりと睨むと父は一瞬怯んだが、直ぐにドタバタと足音を立てながら窓辺に座るマリアの元まで駆け寄ってきた。そして何と、何年ぶりかに抱き締められたのだ。

「マリア！マリア！」

泣きながら自身を抱き締めてくる父に戸惑ったマリアだったが、取り敢えず話を聞くために落ち着かせようと背中を優しく撫でた。

「お、お父様・・・まずは落ち着いてください・・・！」

マリアはなんとか父を宥めようとするが、しかし反対に益々強く抱き締めながら、大きな声を出した。

「マリアッ、すまない！お前が、お前が・・・買われてしまった！！」

「・・・は！？」

（買われる！？誰が！？誰に！？）

聞きたいことが一瞬にして爆発したマリアは、自分を抱きしめていた父をベリッと引き剥がして、えぐえぐと大人気なく泣き続ける父の肩を掴みガクガクと揺さぶった。

「お父様！それは！一体！どういうことですか！」

「ううっ・・・それが・・・弟が、この家と土地、全ての権利書を持ち逃げして、すべて売っぱらってしまったようなんだ！」

「っ！？」

マリアの叔父にあたる父の弟は、今までどこで何をしていたのやら、つい先日10年振りにフラリと我が家を訪れていた。しかし次の日にはいつの間にか姿が消えていて、一体何事だったのかと狐に摘まれたような気持ちになっていたのだった。

「そ、そんなっ！？それらはお父様が管理されていたはずでは！？」

「それがあの夜は・・・久しぶりに再会したものだからとついつい飲み過ぎてしまって・・・気付いた時にはもう権利書は弟と一緒に姿を消して・・・調べていたらなんと！売りに出されていた事が分かったんだよ！」

父の言葉に、マリアはクラクラと目眩がしてくる。

「なっ！？・・・おーとーうーさーまー！？」

あまりの間抜けさに、実の父親ながら本気で手が出そうになる。今まで父一人娘一人、手を取り合い協力しながら細々とやっていたというのに、家どころか愛する人々も土地も全て失ってしまったなんて、これからどうすれば良いのかが全く分からない。しゅるしゅると元気の無くなる娘に父は最後の止めを刺す。

「そしてその権利書を買ったのがゴーマンなのだ」

「ゴ、ゴーマン！？悪徳金貸しではないですか！」

マリア達も過去に不作が続いたり、領地で災害が起きた時など、どうしようもなくなった時にゴーマンから金を借りた事があるのだが、あり得ない程高い利子により借りた時の何倍もの金額を要求されてしまったため、返済に何年もかかってしまった事があったのだ。そんなやつに家も土地も奪われてしまっては、死ぬまでかかっても絶対に取り返せないだろう。

「だが今日、そんなゴーマンから権利書を買取っても良いと仰る方が現れたんだ！しかも権利書をそのまま我が家に戻して下さるとも仰ってる！」

「っえ？ええっ！？」

マリアは目を白黒させた。余りに怒涛の展開過ぎて頭がついていかない。だが、| 無料 《ただ》より高いものはないのだ。その親切な方は一体何が目的なのだろうか……。というか、もしかして……。マリアの頭の中に、先程の父の言葉が蘇る。

「それで……。だな、その……。その御方はマリア、お前を欲しがってるんだ」

「すまない……。」フレディは酷く憔悴し、落ち込んでいるように見えるが、それはやはり権利書の対価として、マリアを差し出さないといけないと覚悟しているからだだろう。マリアが行かなければゴーマンは領民達を追い出してしまうかもしれない。それも、直ぐにでも。となればマリアにとっても、それはやはり決定事項であった。

「……。分かりました。私その方の所へ行きます」

「すまないマリア……。！」と啜り泣く頼りない父親を憎むべきなのだろうが、こう見えて領民のため、家族のためには一生懸命な人だと言うことは分かっているのだから、きっとどう足掻いてもこれしか方法がないのだろう。そう考えたマリアは、べそべそと泣く父親をこれ以上責めることは出来なかった。部屋を出る時に見た父親の背中では普段よりも何倍も小さく丸まっていて、マリアはそれを見てより心を奮い立たせる。

(私を欲しがっている方がどんなお方かは分からないけれど、掃除も洗濯も得意なもの！ドンと来いよ！)

—————

突拍子もない話を聞いてから数日後、あっという間に住み慣れた我が家を離れる日がやっ

てきた。雨が降るたび雨漏りし、何度も修理を施した屋根も、皆で手分けして綺麗に塗り直した外壁も、花の代わりに野菜を植えている小さな庭園も、屋敷のいたる所に小さな頃からの思い出が詰まっている。

マリアは最後に、もう二度と戻る事の無いであろう自分の部屋を綺麗に掃除して、ベッドサイドに残していた母が生きていた頃に家族三人で撮った家族写真を鞆に詰め込んだ。それから、静かにドアを閉めた。

ささやかな私物を詰め込んだ小さな鞆を持ち庭へと降りると、驚くほど大きく、生まれてこの方一度だって見た事が無い程きらびやかな4頭引きの馬車と、その傍らに立つ小さな父親の姿が見えた。

「えっ・・・！？」

（も、もしかしてあれが迎えの馬車なのっ！？）

一応持っているドレスの中でも一等マシなものを着てきたつもりだったのだが、もしこの馬車に乗るのであれば明らかに落第点だろう。マリアが驚きのあまり階段の途中で止まっていると、従者が馬車のドアを開ける。

ーーガチャッ

驚くほど大きくきらびやかな馬車から降りてきたのは、輝くほどの美しい金髪をさらりと揺らしたまだ幼さの残る少年であった。歳はマリアの5歳は下であろう。身長だってまだ従者の胸元程しかない。しかし彼はマリアを見つけるやいなや、大きく口を開いた。

「おい！何やってる！？早く降りて来い！今から5秒以内に来なかったら、この話は無かったことにするぞ！？」

「・・・は、はぁ！？なんて失礼な子供なの！」

マリアは余りの失礼な物言いにカチンと来てしまい、思わず心の声そのまま漏れ出てしまう。しかしその瞬間、風よりも早く父が階段を駆け上ってきて、マリアを脇に抱えて馬車で待つ少年の前へと全速力で連れて行った。

「はぁ・・・はぁ・・・ルーク公子様・・・！お待たせして・・・も、申し訳ございません！ふつつかな娘ですがどうぞよろしくお願いいたします！・・・マリア！ルーク様が我

が領地を救ってくださったのだぞ！？今日だってわざわざルーク様自ら権利書を持ってきてくださったんだ！くれぐれも・・・！くれっくぐれも！粗相のないようにな！」

グイグイと頭を下げさせられて、マリアはレンガ敷きの地面が目前に迫る。ここへきて突然恩人が判明し、マリアは父親の言葉に耳を疑った。

（こ、こんな・・・こんな我儘なお子ちゃまが本当に我が家の危機を救ってくださったのっ！？）

しかし視界の先に上等な革靴が見えて、マリアは思わず勘定を計算してしまう。確かに彼の身に付けている靴やジャケットはかなり上質なものだ。マリアはバレないように視線を上げて、こっそりと彼を観察する。彼は父に対しても物怖じする様子もなく対等に会話をしている。恐らく大人と話し慣れているのだろう。眩しいほどに陽の光を反射しているサラサラの髪に、影が出来るほど長いまつ毛、目鼻立ちの整った顔。少年ながらも色気を感じさせるのは少し切れ長の眼のせいだろうか。

「この俺を待たせるなんて・・・！早く行くぞ！」

ルークはマリアを一瞥もせずにくるりと踵を返すと、一人スタスタと馬車へと戻っていく。マリアも従者に声をかけられて、大きな馬車の中へと案内された。中に入るとルークは既に奥の座席に座っていて、顔を少し俯かせて眼を閉じている。マリアはどこへ座ったら良いのか分からず、取り敢えず入口から一番近くの席へと座ろうとした。が、しかし・・・

「おい、何でそんな所に座るんだ？」

「えっ？」

（あっ！もしかして外に座らなければならなかったのかしら！？）

マリアは慌てて立ち上がり頭を下げる。

「すみません！今すぐ外に座りますのでお許してください！」

マリアがサッとドアノブに手をかけると、後ろから慌てたような声がする。

「ちょ、ちょっと待て！誰がそんなことを言ったんだ！」

「・・・えっ？違うんですか？」

「当たり前だろ！お前は俺のっ・・・お、俺の、俺の・・・と、隣・・・に来るべきだろう・・・！」

最後は聞こえるか聞こえないかと言うほどに小さな声だったが、聞き間違いで無ければ隣に座れと言われた気がする。しかし・・・

(えっ・・・何で！？)

大きな馬車の中は当たり前だろうがかなり広く、わざわざ隣に座る必要など無いように思えた。しかし、マリアは彼の顔が変に赤いのに気付く。

(あ・・・！もしかして、体調が悪いのかも・・・？あんなに偉そうにしているも子供だもの。具合が悪いのを中々言い出せなかったのかもしれないわ！)

そう思ったマリアは急いで彼の隣に座った。

「申し訳ございませんルーク様っ・・・気が付かなくて！失礼します・・・！」

マリアはルークの隣に座ると、彼の肩を抱きながらグイッと横向きに倒し、自分の膝に彼の頭を乗せてしまった。ルークはいきなりの事に目を白黒させている。

「はッ！？お、お前！な、な、何をしてっ！？」

しかしマリアはルークの肩に優しく手を置くと、ゆっくりと撫でさすった。

「具合が悪かったのですよね、気付くのが遅くなってすみません。遠慮なさらず、どうぞ私の膝をお使いください！」

マリアは時折、領民の子供達に字を教える青空教室のようなものを開いており、その際に具合が悪くなった子供がいれば膝を貸した事もあった。

口の悪いルークになにか言われるだろうかと内心ドキドキしていたのだが、相当に具合が悪かったのだろう。結局何も言われることは無かった。暫くはピクリとも動かなかった

が、その内にスヤスヤと穏やかな寝息が聞こえてきて、マリアはホッと安堵してようやく肩の力を抜いた。

（良かった・・・！やっぱり具合が悪かったのね！）

第一印象は最悪だったとは言え、わざわざ取り戻した家や土地の権利証を自ら持ってきてくれたのだ。ついでとはいえ、買われた立場である自分までも公爵家の馬車にのせてくれる所を見ると、思ったより悪い子では無いのかもしれない。マリアは膝の上で眠る彼を起こさないように、さらりと頭を撫でる。

「これからよろしくお願いします、ルーク様！」

—————

馬車が公爵家に到着してからそろそろ半刻程が経とうとしていた。きっと公爵家の執事は常日頃から弁えているのだろう、馬車が屋敷に到着したにも関わらず扉からでてこないというのに、外から声をかけられる様子はない。今マリアの膝の上には、昼間の生意気な様子が一切感じられない、スヤスヤと規則正しい寝息をたてる美しい寝顔がある。

（執事さん達も声をかけないのだから、私が起こすのは失礼よね？体調が悪いのだし、あ！でもベッドに移ってもらったほうがいいのかしら・・・？）

マリアがうんうんと悩んでいると、長いまつ毛がふるっと震えて、エメラルドのような澄んだ瞳と目が合う。寝起きでボーッとしているのだろう。彼は嬉しそうに目を細めてふわりと笑うと、マリアの頬へ手を伸ばし優しく顔に手を添えてきた。

「やっとな・・・」

（えっ？もしかして・・・誰かと間違えてる？）

マリアがオロオロと困惑していると、段々と彼の意識が覚醒してきたようだ。彼は突然瞳を大きく見開いたかと思えば、パチパチと瞬きを繰り返す。口をパクパクと開けたり閉めたりしているが、中々声が出てこない。マリアは取り敢えず彼を落ち着かせよう、ルークに向かってニッコリと笑いながら挨拶をした。

「おはようございます、ルーク様！体調はいかがですか？」

しかし、彼の顔色はみるみる真っ赤に染まっていく。

「なっ・・・！おま・・・！いつから・・・！？ずっと、見てたのか・・・！？」

「え？は、はい。お疲れのようでしたので声をかけずにおりました」

「な、な、な・・・！～～っ！」

ルークは何か言いたげに口を開いたが、結局言葉にすることはなくそのまま口をつぐむと、黙ってドタバタと荒い足音を立てながら馬車を降りてしまった。ポツン・・・と残されたマリアは呆気にとられる。

「さ、早速何か怒らせてしまったかしら・・・？」

マリアが一人残された馬車で青ざめていると、マリアへと声をかけてくれた男性がいた。ルークの執事で"ビスター"と名乗った年若くも落ち着いた雰囲気の男性が、胸に手を当てながら申し訳なさそうに謝ってくる。

「マリアお嬢様、婚約者を放って一人馬車を降りてしまった無礼をお許してください。ルーク様はまだ紳士としては未熟な部分が多々ございまして・・・」

何やら聴き逃がせない言葉が聞こえたため、マリアは慌ててビスターの話の途中で遮る。

「あ、あの・・・！執事様、誰かとお間違えでは？私はお金で買われた身なのです！」

「・・・失礼ですがお名前はマリア様で間違いありませんよね？」

「？はい、そうです」

「タルニス男爵家の一人娘でいらっしゃる？」

「ええ、そうです」

「年齢は 16 歳とお聞きしておりましたが？」

「はい、先月 16 歳になりました・・・あ、あの！もしかして私は正規雇用では無いのですか！？」

マリアが顔を真っ青にして尋ねると、ビスターはガックリと肩を落とし深い深い溜息をつく。

「はあ～・・・」

「あ、あの・・・ビスターさん、もしこちらで働けずにお話を取り消しなんてことになってしまったら、私一体どうしたらいいのかっ・・・！」

必死にビスターに詰め寄ると、ビスターは慌てたようにマリアに謝罪してきた。

「失礼いたしました！私もまさかルーク様がそれ程までに腑抜けているとは考えもしませんでしたので・・・」

「えっ？」

「いえ、何でもございません。マリアお嬢様、何の心配も要りません。腑抜けた主人に代わり私がお嬢様のサポートをさせていただきます。ではまずはお嬢様のお部屋にご案内致します」

何やら先程から信じがたい言葉が聞こえてくるような気がしたが、公爵家の一人息子の執事が言うセリフではなかったような気がしたので、早々に忘れる事にした。こういった深入りしない態度も、世知辛い世間の中で働く為には必要な事なのだ。それにしても、ただの侍女にも一流のもてなしをするとは流石公爵家是对応が違う。マリアは気持ちを切り替えて背筋を伸ばすと、ビスターへ挨拶を返した。

「はい！今日から（侍女として）よろしくお願い致します！」

丁寧にお辞儀をすると、ビスターが僅かに目を瞠る。貴族の嗜みとして、基本的な所作だけは亡き母から徹底的に叩き込まれたので身体が覚えている。ただ、覚えているのはほんの僅かな基本的な所作と、後は踊る機会のないダンス位なのだが・・・。小さな頃は、毎年寒い季節に催される村の雪祭でステージに立ってダンスを披露していた程の腕前だった。だが貧しくなってからはダンスどころではなくなってしまったので、何時しかステージに立つどころか、参加さえしなくなってしまっていたのだ。

(皆元気かな・・・)

早速離れた故郷に思いを馳せ、マリアは少しだけ涙ぐむ。そして視界に入り切らない程に大きな屋敷を見上げた。今日からは家族も知り合いもないこの大きな屋敷で侍女として働くのだ。

一気に心細くなってしまった自分に気合を入れるべく、マリアは両頬を両手でパシン！と叩いた。

(弱気になっちゃ駄目よマリア！きちんと働いて恩を返さない！)

そうして決意を新たにしたマリアは少し先で振り返って待っていてくれているビスターの後を慌てて追いかけた。しかしビスターに案内されたその部屋は・・・

「あのビスターさん・・・ここって本当に私のお部屋なんですか？」

「私に敬称は必要ありませんので、どうぞビスターとお呼び下さい。この部屋はルーク様をご用意されたマリアお嬢様専用の部屋でございます」

マリアが案内されたその部屋は信じられないほど広く、マリアの実家と言えば応接室以上の広さだった。家具や壁紙はアイボリーで揃えられ、カーテンやクッションなどにピンク色や可愛らしい花のデザインがあしらわれたとても可愛らしい雰囲気の部屋だった。実家の自分の部屋と家具の配置が何となく同じなのは偶然だろうが、しかしそれのお陰なのか初めての筈のこの部屋も何となくしっくりとくる。

(こんな可愛いお部屋に住んでみたいと憧れていた時期もあったわ・・・まるで理想通りのこんなお部屋に住めるなんて夢みたい！公爵家って凄いのね！侍女にまでこんな部屋を与えてくれるなんて！)

マリアが部屋の中をキョロキョロと見回しながら進んでいくと、ビスターが後から付いてきて家具の使い方や小物の収納場所などを細かく説明してくれる。その説明から、どうやらルークが細部までこだわって用意してくれたらしいのが分かった。そして説明の最後・・・

「もし何かあればあちらのドアをお使いください・・・」

ビスターが手で指し示す先にはドアがあった。淡いピンク色をしたそのドアは上がアーチ型になっていてとても可愛らしく、何もなくてもつい開けてしまいそうだ。

「ドアの向こうはルーク様の私室と繋がっておりますので」

「そうなんですね。承知しました！・・・って、えっ！？ルーク様の私室と繋がってるんですか？私の部屋と？あのピンクのドアで？何故っ！？」

マリアが混乱のままにビスターに詰め寄ると、彼は眼鏡を中指で直しながら丁寧に説明してくれた。

「マリアお嬢様・・・お嬢様の仕事は唯一つですが、他に替えの効かないかなり重要なお仕事ですので、心してお勤めくださいませ・・・お嬢様のお仕事は"ルーク様のお相手"でございます」

「ル、ルーク様のお相手・・・というお仕事？ですか？」

（お相手ってもしかして遊び相手って事・・・？）

ビスターが至極真面目な顔をするものだから、マリアは明らかに冗談としか思えないこの仕事内容に、どう反応して良いか分からなかった。

「あ、あはは・・・それは面白い冗談・・・ですね？」

うまく笑えずに引きつったような笑顔でビスターを見るが、彼の瞳は真剣そのもので、尚且マリアの言葉もピシヤリと否定された。

「冗談ではありませんマリアお嬢様。良いですか！？ルーク様は大人びて見えるかもしれませんが、その実非常に繊細なお方です。すぐ傷付いてしまいます！なのでマリアお嬢様、貴方の行動や態度、言葉一つでルーク様の勉強の出来や訓練、それらに対するやる気が！大～きく変わると心得てくださいませ！マリアお嬢様はとにかく、ルーク様のモチベーションを高めるために、ルーク様が求める以上の事をマリアお嬢様ご自身で読み取って頂き、その上でより多くの"愛"を！ドクドクと注いで頂きたいのです！」

「え？あ、愛・・・？ドクドク・・・？」

ビスターの熱の入った勤務内容の説明とその注意事項に、 MARIA はメモを取れば良かったと後悔するが、しかしまだ説明は終わっていなかったらしい。ビスターが再び仕事内容についての詳細な説明を始めたので、慌ててポケットから小さな紙を取り出すと、ビスターはすかさずスッとペンを差し出してくれる。流石、公爵家の執事ともなると、侍女に対しても細やかな気遣いをしてくれるようである。MARIA はお礼を伝えてから、尊敬したようにビスターを見つめる。そして、彼の説明はその後も延々と続いた。

「それでは次にルーク様の好きな事、嫌いな事をお伝えいたしますので、今後の参考にされてください！」

「は、はいっ！」

そうしてビスターによるルーク講座はメモ用紙が何枚もびっしりと埋め尽くされた所で、ようやく終わったのだった。

(つ、疲れた・・・！ただ話を聞いただけなのに！)

「おや、もうこんな時間ですね・・・急がないと間に合わなくなってしまうそうです」

MARIA がぐったりと机につっぷしている間に、ビスターは懷から懷中時計を取り出して時間を確認すると、直ぐに侍女を呼んだ。すると待機していたらしい3人ほどの侍女がぞろぞろと部屋へと入ってくる。ビスターはテキパキと指示を出した。

「急ですまないが、MARIA お嬢様を夕食までに完璧なご令嬢に見えるよう磨き上げてくれ」

「・・・・・・・・・・えっ！？私をですか！？」

MARIA はまさか侍女として働きに来た自分に侍女が付くとは思わず、大きく戸惑っているが、しかし3人の侍女達はバァッと顔を輝かせながら大きく頷いている。

「お嬢様の身支度を任せて頂けるなんて、我々も腕がなりますわ！MARIA お嬢様！私達に全てお任せ下さいませ！お嬢様を帝国一の美女にして差し上げますわあっ！」

「え？ええっ！？な、なに！？ビスターさん！これは一体どういう事ですかっ！？」

マリアは話の展開に付いて行けず、お風呂場へと連れ込まれようとするのをどうにか踏ん張り、扉に張り付いて耐えながらビスターに助けを求める。しかしビスターは丁寧に一礼しただけだった。

「マリアお嬢様、旦那様から夕食の招待を受けておりますので、急いで準備をお願いします。また時間になったらお迎えに上がりますので」

「えっ！？何故公爵様は私をご招待なさったんですか！？ビスターさん！もっと詳しい話を・・・！！っきゃあああっ！」

しかしマリアの疑問は優秀な侍女達の施術により、あっという間に悲鳴に変わる。マリアはお風呂場へと連れ込まれると全身を丁寧に洗われ、磨かれ、そしてビスターが再び部屋へと迎えに来る頃には、マリア自身でも本当に「誰っ！？」と言う程美しく変身させられていたのだった。荒れていた髪は花のオイルでかつての艶やかさを取り戻した上、緩く編み込まれて小さな花の髪飾りが散りばめられている。ドレスは胸元にきらびやかな宝石が散りばめられた可愛らしくも上品なデザインだった。侍女達によればこれもルークが用意してくれていたらしいのだが、不思議な事にドレスのサイズは詠えたようにピッタリだった。

そんな大変身したマリアを一目見た瞬間、迎えに来たビスターは顔を輝かせた。

「マリアお嬢様・・・！素晴らしいです！これならルーク様もお気に召すでしょう！」

「ええっと・・・ありがとうございます？」

正直マリアには自身が綺麗に着飾られるだけで、あの眉間にシワの寄った少年の機嫌が変わるなんて到底思えなかった。

（でも、雇い主様なんだしきちんと気に入られなくっちゃね！）

「あのビスターさん・・・」

「"ビスター"です。慣れてくださいね、マリアお嬢様」

「えっと、あ、はい・・・では、ビスター？私の仕事の"ルーク様のお相手"といつのはその・・・ズバリ・・・あの、よ、"夜の"という事なんですかっ！？」

マリアがこうも心配したのは、先程侍女から三人に丁寧に丁寧に洗われている時に、彼女達がうっかりと口にできてしまっていたからだった。

『もし気に入られれば夜もお呼ばれされるのだから、特別美しくしないとっ！』

という言葉・・・いくらマリアが母を早くに亡くしたとはいえ、流石に"夜のお呼ばれ"という意味くらいは理解している。何をするか、という具体的な所まではよく分からないとしても。

「え？ああ・・・うーん。ルーク様が求められた時はそうですが、ただ暫くはそのような心配はいらないかと」

「えっ！？あ・・・ああ！そ、そうなんですね！・・・嫌だわ私ったら・・・！！急に変わった話をしてごめんなさいっ！」

一人で早合点してしまったのがとても恥ずかしい。やはり金で買われたとはいえ、わざわざ貧乏貴族の娘を夜の相手として選ぶ公爵家ではないのだ。ホッと溜息をつくマリアにビスターから声がかかる。どうやら時間が来たらしい。

「さあ、もう時間ですね！では参りましょうか」

.....